



Data

監督・脚本・編集・撮影：
 ラヴ・ディアス

出演：チャロ・サントス・コンシオ
 /ジョン・ロイド・クルズ/
 マイケル・デ・メサ/シャマ
 イン・センテネラ・フエンカ
 ミノ/ノニー・フエンカミノ
 /マージ・ロリコ/メイ
 ン・エスタネロ/ロメリン・
 セイル/ラオ・ロドリゲス/
 ジーン・ジュディス・ハビエ
 ル

👁️👁️ みどころ

韓国には3大国際映画祭を制覇したキム・ギドクという私の大好きな韓国人監督がいるが、フィリピンにもラヴ・ディアス監督がいることを発見！

彼の映画は度肝を抜く長尺とワンシーン・ワンカットが特徴だから、3時間48分の本作は異例の短さ。トルストイの短編に着想を得た本作は哲学的で難解だが、こりゃ必見！

近時の日本の純愛ものとは大違いで、ヒロインも3人の主要登場人物もヘンな奴ばかりだが、その奥深さをしっかり確認したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■隆盛のフィリピン映画に注目！■□■

近時フィリピン映画が注目されており、『シネマルーム40』でも『ローサは密告された』（16年）を収録した（『シネマルーム40』259頁参照）。

韓国には、『サマリア』（04年）（『シネマルーム7』396頁参照）で第54回ベルリン国際映画祭の銀熊賞（最優秀監督賞）を、『アリラン』（11年）（『シネマルーム28』206頁参照）で第64回カンヌ国際映画祭のある視点部門最優秀作品賞を、『嘆きのピエタ』（12年）（『シネマルーム31』18頁参照）で第69回ベネチア国際映画祭の金獅子賞を受賞して3冠を制覇したキム・ギドク監督がいる。

しかして、フィリピンにも、『昔のはじまり』（14年）で第67回ロカルノ国際映画祭金豹賞を、『痛ましき謎への子守唄』（16年）で第66回ベルリン国際映画祭銀熊賞を、本作で第73回ベネチア国際映画祭金獅子賞を受賞する形で3冠を制したラヴ・ディアス監督がいることに注目！

■度肝を抜く長尺とワンシーン・ワンカットに注目！■

1958年生まれのラヴ・ディアス監督は観客の度肝を抜く「長尺」をトレードマークとする映画作家で、その作品は平均で5～6時間、時に10時間を超えるらしい。しかし、その圧倒的長さにもかかわらず、観客はディアス特有のリズムがもたらす“魔術的魅力”に引き込まれ、メルル・ストリープ、サム・メンデスなどハリウッドの映画人らも巻き込んだ「ラヴ・ディアス中毒」が世界中に増え続けているらしい。

それに比べると、本作の3時間48分はディアス監督作品の中では異例の「短さ」だそうだからビックリ。さらに、ディアス監督の映画は、ワンシーン・ワンカットの魔術的映像美が特徴だというから、それを本作でしっかり確認したい。

■着想はトルストイの短編。こりゃ難解！■

ディアス監督の『北—歴史の終わり』(13年)はドストエフスキーの『罪と罰』から着想を得たものらしい。それに対して、本作はトルストイの短編『God Sees the Truth But Waits(神は真実を見給ふ、されど待ち給ふ)』から着想を得たらしい。そのココロは“人生を本当の意味で理解している者はいない”だそうだから、いかにも難しそう。

ディアス監督は本作について「人間として、何が我々を形づくるのか？」と問題提供したうえ、「今や記憶があるのは物語の前提のみで、詳細や登場人物の名前は忘れてしまっています。しかし読んだ時に、“人生を本当の意味で理解している者はいない”と書かれていたことに衝撃を受けたことは忘れられません。我々が何も分かっていない、ということは、我々の存在についての極めて重要な真実の1つでしょう。言い換えると、我々の中には少なくとも連続性を感じられる人々が存在し、我々が為すことは派生的になり得るということです。さらに多くの場合、我々は人生の虚構に従いそして屈服してしまいます」と解説している。

これを読んだだけでも本作はかなり哲学的で難解そうだが、さて、ついていけるかな・・・？

■ヒロインはおばさん(老女?)！物語の起点は？■

去る6月12日に観た『飲びのトスカーナ』(16年)は、精神病施設に入っている女同士の友情をテーマとして、人間の生き方を問う名作だった(『シネマルーム40』121頁参照)。そして、同作のヒロインは2人ともかなり変だったが、それなりの美人だった。しかし、本作の主人公ホラシア(チャロ・サントス・コンシオ)は元小学校の教師だが、刑務所に30年間も入っていたから、すでに60歳前後の到底美人とは言えないおばさん(老女?)。したがって、本来ならそれだけで映画としての魅力は半減されるはずだが、さて本作は・・・？

ある日、同じ受刑者ペドラ（シャイマイン・センテネラ・ブエンカミノ）から、「真犯人は自分だ」と思いがけない告白をされたことによって、ホラシアは釈放。それはそれで嬉しいことだが、ホラシアが犯人とされた殺人事件の黒幕がホラシアのかつての恋人ロドリゴ（マイケル・デ・メサ）だったことがわかると・・・。

釈放されたホラシアがとりあえず昔の家に戻ったのは当然だが、そこでは一家は離散し、息子は行方不明、夫はすでに死亡していた。娘だけは生きていたようだが、そんな状況下ホラシアが新たに生きていく目的は・・・？

■□■奇妙な登場人物とモノクロ映像に注目！■□■

本作の基本プロットは、無実の罪によって30年間も刑務所に入れられていたホラシアおばさんが出所後、自分を陥れた元恋人のロドリゴへの復讐に立ち向かうもの。それだけ聞くとハリウッド映画にもよくあるパターンだが、ロドリゴの家の周りをうろつくホラシアの周辺に登場する人物は変な奴ばかりだ。

本作は冒頭の刑務所のシーンから、ワンシーン・ワンカットの手法が顕著だから、ド派手かつスピーディな展開を特徴とする近時のハリウッド映画に比べるととにかくスローテンポ。なるほど、これが近時普及しつつある映画用語「スローシネマ」の範疇なのかということがよくわかる。そんなワンシーン・ワンカット、そして、スローテンポで進む物語に、モノクロ映像の中で登場するのは、①バロット（アヒルの卵）売りの男（ノニー・ブエンカミノ）、②物乞いの女マメン（ジーン・ジュディス・ハビエル）、③心と身体に傷を抱える謎の「女」ホランダ（ジョン・ロイド・クルズ）の3人だ。日本でも近時格差社会の拡大が叫ばれ、底辺社会におけるさまざま社会問題が指摘されているが、本作に見るバロット売りの男、物乞いの女マメン、謎の女ホランダほど底辺の人間は日本ではなかなか見当たらないのでは・・・？

ちなみに、都市問題をライフワークとしている私には、バロット売りの男の家（不法占拠のアバラ屋？）を含む周辺一帯のスラム街が取り壊されるシークエンスはハチャメチャだが、どうもこれがフィリピンの現状らしい。また、日本では近時LGBTの市民権が拡大している（？）が、ゲイの男ホランダの苦しみや悲しみを見ていると、あまりLGBTを讃歌するのは如何なもの、と思ってしまう。ホラシアが教会で物乞いをする女マメンから貴重な情報を聞き出したり、バロット売りの男の手引きで闇のルートの手銃を購入できたのはラッキーだが、こんなおばさんの素人探偵では、ロドリゴへの復讐など到底無理。中盤から飽きさせることなく続くワンシーン・ワンカットの展開を見ていると、そう思ってしまうが、さて・・・？

■□■本作の上映は大変！興行は如何に？■□■

何ゴトも目的達成に至る過程が大切で面白いもの。したがって、それを長々と描く本作

は、その映画制作手法の独自性と共にその展開が興味深い。それに対して、目的達成の瞬間自体は、ある意味あっけないことが多いが、さて本作では・・・？

毎年2月に発表されるアメリカのアカデミー賞は世界の映画祭として注目されているが、ベルリン、ベネチア、カンヌという3大国際映画祭は、クソ難しい映画が受賞することが多いこともあって、日本では公開されない映画もあるそう。すると、平均で5、6時間、特に9時間を超える作品もあるというディアス監督の映画は、日本での公開が難しいのは当然だ。本作は幸いディアス監督の中でも比較的短い3時間48分だが、それでも日本での公開は大変だ。しかし、本作は12月に第七芸術劇場で公開されるそうだから、その「英断」に拍手！

日本の若者たちには、日々大量宣伝されている安易な純愛ものばかりに行かず、たまにはこんなものすごい映画を鑑賞して、人生を深く考えてもらいたいものだ。

2017（平成29）年11月15日記